

# 高等学校用英語教科書における文学

——教材本文と発問のあり方を中心に——<sup>1</sup>

---

小野 章

---

## 1. はじめに

第二言語もしくは外国語としての英語教育に文学を活用することの意義を説く研究者は少なくない (Brumfit and Carter; Carter and Long; Carter and McRae; Collie and Slater; Lazar; Widdowson; 植木・小野; 海木・斎藤・中村・室井; 木塚; 中村; 西原)。英語教育に文学を活用することの利点として、例えば中村は、「様々な style の authentic な言語教材を提供出来る」「個人の成長や人間性を豊かにする」「文化学習に効果的である」「作品への興味から言語学習の動機づけになる」等を挙げている (中村 115)。

文学の利点を指摘する声とは裏腹に、現在の日本の高等学校英語教育では、文学が使われることは残念ながらほとんどない。その大きな理由のひとつに、「文学は難解である」といった考えがあろう。この「難解さ」には少なくとも2種類のものがあると思われる。ひとつは、語彙、文構造、話の展開といった、テキストを「正しく理解する」上での難解さである。もうひとつは、テキストを正しく理解した上で、さらに読者が展開すべき解釈上の難解さである。本論では、これら2種類の難解さをいかに軽減させるかについて考察したい。

文学作品に不慣れな学習者に対し、「とにかくこの本を読みなさい」といった指導では、大きな教育成果は期待できまい。そこで本論では発問に着目することにした。発問は文学の読みを誘導する、と筆者は考えている。文学の場合、読みは最終的には解釈へと行き着く。解釈に至るまでの過程で、数種類の発問を段階的に読者がこなしていくことが肝要と考える。

次のように、教科書分析と教材開発の2部構成で論を進めたい。

- (1) 教科書分析：高等学校用英語教科書から、文学作品を対象としたレッスンを取り上げ、どのような発問が付けられているかを本文と併せて分析する。
- (2) 教材開発：(1) の分析の結果、本文や発問が不十分だと判断される場合

---

<sup>1</sup> 本論は、平成20年度広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト推進経費の助成を受けまとめられた報告書に加筆修正を施したものである。

は、その代替案を提示する。

## 2. 高等学校用英語教科書における英語文学分析

本論は、平成15年に検定を受けた高等学校用英語リーディング教科書全12冊を対象に、いかなる英語文学（原作が英語で書かれた文学）が使用されているかを調べた。英語文学が扱われている例が少ない中、J. K. Rowling のものが2件、異なる教科書に掲載されていた。もちろん、Rowling を「文学」とみなすこと自体に抵抗する向きもあろう。しかし、Rowling が書いた *Harry Potter* シリーズは「ファンタジー」という文学の一形態を少なくともとっている<sup>2</sup>。本論では、同シリーズは英語文学の範疇に入ると判断したい。

Rowling を扱っているのは、*New Stage: English Reading* (池田書店) の Part 1 の Lesson 25 と *Planet Blue: Reading Navigator* (旺文社) の Lesson 17 である。以下、これらふたつのレッスンを本文と発問の両面から分析する。

### 2.1. *New Stage, Part 1, Lesson 25: Platform 9<sup>3/4</sup>* の分析

このレッスンは、*Harry Potter* シリーズの第1巻 *Harry Potter & The Philosopher's Stone* を扱ったものである。レッスンの本文では、作品（原作もしくはそれを書き換えたもの）からの引用は一切無く、代わりに、Harry が魔界の学校に行くことになった経緯や、学校への特別列車が出発するキングズ・クロス駅プラットフォーム9<sup>3/4</sup>の存在などが紹介されている。この本文に続く “After You Read” というセクションに次のような発問が見られる。

#### After You Read

本文の内容に合うように、〔A〕と〔B〕を組み合わせなさい。

- 〔A〕
1. *Harry Potter* is the title of a book series
  2. Harry receives a letter of invitation
  3. Hogwarts is the school
  4. Platform 9<sup>3/4</sup> is the platform

---

<sup>2</sup> 「ファンタジー」というジャンルに関しては、*A Dictionary of Literary Terms* (UK: Longman, 1992) に次のような記述がある。“ ‘Fantasy’ literature deals with imaginary worlds of fairies, dwarves, giants and other non-realistic phenomena. A fantasy world may be an entirely consistent parallel with the ordinary world, as in the fairy-tale trilogy *The Lord of the Rings* (1954-5) by J. R. R. Tolkien which makes use of many Nordic myths; or it may have a dream-like illogicality and episodic structure, as in Lewis Carroll’s *Alice’s Adventures in Wonderland* (1865).” この記述からも、*Harry Potter* シリーズが「ファンタジー」というジャンルに属すると判断できよう。

- 〔B〕 a. when he becomes eleven years old.  
b. which is written for children.  
c. where Harry should get on the special express.  
d. where magical children get together by invitation.

本文を読んでその内容をしっかりと把握すれば答えることができる問題である。本論では「内容確認のための発問」と呼びたい。

## 2.2. *Planet Blue: Reading Navigator*, Lesson 17: An Interview with J. K. Rowling の分析

レッスン本文は、作家と作品を簡単に紹介した後、ふたつの質問（“When did the idea for Harry Potter first enter your head?”と“Can you describe the process of creating the stories?”）へのRowlingの応答を、レッスンのタイトル通り、インタビュー形式で載せている。作品からの引用は一切見られない。本文に続いて、以下のような発問が掲載されている。

### As You Read

インタビューを読んで、次の質問に答えてみましょう。

- (1) ローリングにハリー・ポッターのイメージが最初に浮かんだのはどこですか。
  - (2) ホグワーツ魔法学校の場所はどこに設定されましたか。また、その理由は何ですか。
- （(3)～(5)は省略。）

### After You Read

インタビューを読んだ感想を話し合ってみましょう。

“As You Read”の問題は本文の内容理解の促進を目的としている。本文に書かれた内容を理解しておけば答えられるという意味で、2.1.の「内容確認のための発問」と同レベルである。一方、“After You Read”の発問では内容確認以上のものが求められている。学習者は、本文の内容をしっかりと確認した上で、さらに「感想」といった主観的なものを提示しないとイケない。

## 2.3. 教科書分析のまとめ

本節第1項と第2項で分析した結果をまとめると表1の通りになる。

表1：Rowlingを題材としたレッスンの本文と発問

教科書名・レッスン名	本文の種類と内容	発問の内容
<i>New Stage</i> Part 1, Lesson 25: Platform 9¾	記述文：作品の一部の あらすじ紹介	「内容確認のための発問」4題
<i>Planet Blue: Reading Navigator</i> Lesson 17: An Interview with J. K. Rowling	記述文：作者紹介	「内容確認のための発問」5題 「感想を求める発問」1題

ふたつのレッスンのいずれにおいても文学作品そのもの(原作もしくはその改作)は使用されておらず、代わりに、作者の経歴・作品が誕生した経緯・作品のあらすじ等が記述文の形式で本文として掲載されている。本文に続く発問の数はふたつのレッスンを合わせると10であるが、「内容確認のための発問」が9題あるのに対し、「感想を求める発問」は1題しかない。

### 3. 高等学校英語教育における英語文学のあり方をめぐる提言

前節の分析に基づいて、高等学校での英語文学のあり方に関する本論の考えを、教材本文と発問とに分けて提示したい。

#### 3.1. 教材本文のあり方をめぐる提言

文学の読みは最終的には解釈へと行き着く。もちろん、解釈は文学の読みに限られたものではない。解釈は、言語によって表現されるいかなるものにも付随するものであり、よって、新聞・雑誌・電気製品の取扱説明書等の言語においても解釈が入り込む余地はある。それでも、解釈をもっとも許容する言語形態(の少なくともそのひとつ)は文学であろう。

文学の読みが最終的には解釈に行き着くものだとすれば、解釈の可能性を秘めた文章を扱うべきであり、それには原文が最適であると思われる。しかし、原文の場合、使用されている語彙や文法が高校生には難解過ぎる可能性がある。その際は、元々平易な英語で書かれた原文を選定するか、あるいは原文を易しく書き換えたものを使用するといった対策が考えられる。いずれにせよ、作品を説明した「記述文」のみではなく、作品そのものも取り入れることを提言する。

#### 3.2. 発問のあり方をめぐる提言

教材本文に作品そのものを使用したとしても、それのみでは高校生の解釈は助長されまい。解釈へと至るには、作品本文に関する発問の存在が有効となる。前述のごとく、Rowlingを扱った教科書の発問には、「内容確認のための発問」と「感想を求める発問」の2種類があった。これら2種類の発問それぞれに意義がある

ことは認める。学習者は、「内容確認のための発問」の助けを借りつつ、まずは「正確に」本文を読む必要がある。しかし、その後すぐに「感想を求める発問」へと移るのはやや性急に思える。もっと段階を踏まえた上で発問を作成する必要があるだろう。

解釈へと至る発問を段階的に作成する際に参考となるのが、C. Nuttall (1982) による発問分類である。Nuttall は、文学の読みに限らず、英文読解における発問の種類を以下の通り 5 つに分けた。

- Type 1 Questions of literal comprehension
- Type 2 Questions involving reorganization or reinterpretation
- Type 3 Questions of inference
- Type 4 Questions of evaluation
- Type 5 Questions of personal response (Nuttall 132-33)

この 5 タイプの発問に修正を加え、日本の高校生により適した発問分類を考案したい。まず、Nuttall の Type 1 と Type 2 であるが、例えば、前者は代名詞 “he” が誰を指すのかを考えさせるような部分的な理解に関わる発問であり、後者は話のあらすじを考えさせるようなより全体的な理解に関わる発問である。このような違いこそあれ、Type 1 と Type 2 はともに正確な内容理解を確認する発問であり、本論ではこれらをまとめて「タイプ A：内容確認のための発問」とする。次に Nuttall の Type 3 であるが、これは推論力が要求される発問である。本論としても、この Type 3 はひとつの発問として独立させたまま、「タイプ B：推論力を要する発問」としておきたい。文学作品には、はっきりとではなく暗示的にしか書かれていないものがある。それを読み取るためには、書かれている内容を「表面的に」理解するだけでは（つまり、「内容確認のための発問」に答えるだけでは）不十分である。行間を読みながら、暗示されたことの「真意」をつかむ必要がある。最後に、Nuttall の Type 4 と Type 5 をひとつにまとめたい。Type 4 には、書き手の先入観などを問う、いわゆる「批判読み」などが含まれる。また、Type 5 は読んだものに対する感想を読者に聞くような発問である。これらの発問に対しては明確な答えは存在せず、ゆえに人によって答えが異なってくる。本論ではこれらをまとめて「タイプ C：解釈に関わる発問」とする。このように、Nuttall の分類による 5 タイプの発問を 3 タイプにまとめ直すことで、発問の作成がより容易になることが期待される。

基本的にはタイプ A からタイプ C の順番で文学教材を読み進めて行くことになろうが、場合によってはその順番が入れ換わることも考えられる。また、教材

本文の同じ箇所をめぐって異なるタイプの発問を作成することも可能となろう。肝要なのは、タイプ A からタイプ C までの 3 種類の発問がバランス良く散りばめられていることである。以上のことを図示すると次のようになる。

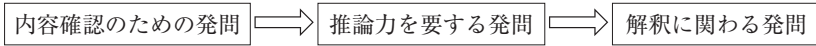


図 1：本論が提言する発問のイメージ

#### 4. 英語文学を元にした教材開発

第 2 節では、教科書による英語文学の扱いが、レッスン本文、発問ともに不十分であることを指摘した。それに基づき、第 3 節では、(1) 教材本文には作品そのものも使用することと、(2) 発問には「内容確認のための発問」「推論力を要する発問」「解釈に関わる発問」の 3 種をバランスよく配置すること、の 2 点を提言した。これら 2 点の提言を踏まえ、本節では *Harry Potter* を対象に、教材本文および発問の具体例を示したい。

##### 4.1. 教材本文の例：*Harry Potter* の原文を用いて

*Harry Potter* シリーズで使用されている英語は、若干難解な表現や語彙を含むものの、高校生にとって難し過ぎると思われる。現に、下に引用した原文の難易度を Flesch Reading Ease Formula で測定したところ 88.70 であった。日本の高校生が原作のまま読むのに適していると判断されるレベルである<sup>3</sup>。

教材本文には、シリーズ第 1 巻である *Harry Potter and the Philosopher's Stone* から、Platform 9¾ を詳述した第 6 章（“The Journey from Platform Nine and Three-Quarters”）の次の箇所がもっとも適切であると考えている。なお、便宜的に行数を引用文右に付した<sup>4</sup>。

‘Excuse me,’ Harry said to the plump woman. 1  
‘Hullo, dear,’ she said. ‘First time at Hogwarts? Ron’s new, too.’  
She pointed at the last and youngest of her sons. He was tall, thin

<sup>3</sup> 下のように、Flesch Reading Ease Formula では数値が高いほど平易な英語と判断される。より詳しくは、<<http://www.addedbytes.com/code/readability-score>> を参照。

90-100: Very Easy, 80-89: Easy, 70-79: Fairly Easy, 60-69: Standard, 50-59: Fairly Difficult, 30-49: Difficult, 0-29: Very Confusing

<sup>4</sup> テキストは *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (London: Bloomsbury, 2000) を使用した。引用文に続けて、括弧の中に頁数を示す。

and gangling, with freckles, big hands and feet and a long nose.  
 ‘Yes,’ said Harry. ‘The thing is — the thing is, I don’t know how to —’ 5  
 ‘How to get on to the platform?’ she said kindly, and Harry nodded.  
 ‘Not to worry,’ she said. ‘All you have to do is walk straight at the  
 barrier between platforms nine and ten. Don’t stop and don’t be  
 scared you’ll crash into it, that’s very important. Best do it at a bit of a  
 run if you’re nervous. Go on, go now before Ron.’ 10  
 ‘Er — OK,’ said Harry.  
 He pushed his trolley round and stared at the barrier. It looked very solid.  
 He started to walk towards it. People jostled him on their way to  
 platforms nine and ten. Harry walked more quickly. He was going to  
 smash right into that ticket box and then he’d be in trouble — leaning 15  
 forward on his trolley he broke into a heavy run — the barrier was  
 coming nearer and nearer — he wouldn’t be able to stop — the trolley  
 was out of control — he was a foot away — he closed his eyes ready  
 for the crash —  
 It didn’t come ... he kept on running ... he opened his eyes. 20  
 A scarlet steam engine was waiting next to a platform packed with  
 people. A sign overhead said *Hogwarts Express, 11 o’clock*. Harry  
 looked behind him and saw a wrought-iron archway where the ticket  
 box had been, with the words *Platform Nine and Three-Quarters* on  
 it. He had done it. (104-5) 25

この箇所が教材本文に適切であると考えた理由はふたつある。(1) ここに描かれて  
 いるプラットフォームの間の壁が、これから冒険を開始しようという Harry  
 にはまさに「登竜門」として存在する。*Harry Potter* シリーズ全体の冒険がここ  
 に始まると言っても良い。(2) 第2節で分析したふたつの教科書中のレッス  
 ンの本文内容にもちょうど合致しており、教科書の補助教材としてそのまま使用  
 できる。

#### 4.2. 発問の例：*Harry Potter* の原文を本文に用いて

前項に引用した教材本文に対する発問を、種類・解答例・備考と併せて提示し  
 たい。なお、種類をひとつに限定できない発問の場合は、その旨も明記した。

発問1：1行目の“plump”という表現に関し，“plump”と“fat”はどのよう

に違うのか、辞書で調べて、説明しなさい。

種類 : 内容確認のための発問

解答 : 通常, “plump”は「丸々とした肉付きのよさ」を表すのに対し, “fat”は「不快感を与えるほどの肥満」について使われる。

備考 : “plump”は, 高校生にはやや難解であると思われる。そのような表現に注目させることで語彙の理解を図る。また, 語彙の多様さにも気付かせたい。つまり, 日本語にも「太った」「肉づきのよい」「がっしりした」といった様々な表現あるように, 英語にも“fat”“stout”“plump”といった色々な言い回しがあることを学ばせる。

発問2 : 3行目 “the last and youngest of her sons.”は誰のことを指していますか。

種類 : 内容確認のための発問

解答 : Ron

備考 : この場面に登場する3者の人物関係を理解させたい。

発問3 : 後に Harry の親友となる Ron の容貌は3~4行目で “He was tall, thin and gangling, with freckles, big hands and feet and a long nose.”と表現されています。この容姿を絵で表しなさい。

種類 : 内容確認のための発問, もしくは解釈に関わる発問

解答 : 省略

備考 : *Harry Potter* は, 活字を表現媒体としながらも, 視覚的に強く訴える作品である。絵を描くという活動を通して, “gangling”や “freckles”といった語彙の理解が進むと考えられる。また, 実際に描かれる絵は学習者によって異なる。このことを通して, 同じ言語に触れても人によって解釈が異なることに気付かせたい。

発問4 : 12行目の “It looked very solid.”の “It”はプラットフォームの間の壁のことを指しています。何故それは Harry にとって “very solid”に見えたのでしょうか。Harry の気持ちを考えながら答えなさい。

種類 : 推論力を要する発問

解答 : 壁に激突して痛い目にあうのではないかと恐れているから。

備考 : 文学を読む際に登場人物の気持を押し量ることは重要である。はっきりとは書かれていない Harry の気持ちを, 言語の字義通りの意味(「それはとても硬く見えた」)を超えたところで読み取らせたい。



発問5：13～19行目にかけて、Harryが壁に向かって進んで行く様が描かれています。壁を怖がりながらも、彼の決意が徐々に固まっていくことがわかる表現を列挙しなさい。

種類：内容確認のための発問、もしくは推論力を要する発問

解答：“He started to walk towards it.”

“Harry walked more quickly.”

“leaning forward on his trolley he broke into a heavy run”

“he closed his eyes ready for the crash”

備考：上の発問4とは逆のパターンの発問である。つまり、発問4が、字義通りの意味から登場人物の気持を推察させるものであったのに対し、発問5は、登場人物の気持をあらかじめ明かした上で、その気持を表した箇所を探させるものである。作家は表現を巧みに使い分ける。そのことに気付かせ、ひいては言語の豊かさを理解させたい。

発問6：20行目の“It didn't come”の“It”は何を指していますか。

種類：内容確認のための発問

解答：“the crash”（壁に激突すること）

備考：指示代名詞を正しく理解しているかを確認する。

発問7：25行目の“He had done it.”の“it”は何を指していますか。

種類：内容確認のための発問、もしくは推論力を要する発問

解答：hogwarts魔法学校行きの列車が出るプラットフォームにたどり着くこと。

備考：発問6とは異なり、発問7の“it”は、何を指示しているかがはっきりとは書かれていない。学習者は、引用文全体の内容を理解しながら、“it”の指示対象を推し量る必要がある。

発問8：*Harry Potter* シリーズ全体を通して作者 J. K. Rowling が伝えたいメッセージがこの場面には込められていると思われます。その箇所を一文英語のまま抜き出しなさい。

種類：推論力を要する発問

解答：“Don't stop and don't be scared you'll crash into it, that's very important.”

備考：*Harry Potter* シリーズ全体にわたる「作者の意図」は、8～9行目の「ぶつかることを恐がって、躊躇してはいけない」という文に収斂されよう。*Harry Potter* は、主人公 Harry が Ron や Hermione

と共に邪悪な世界に立ち向かう話である。邪悪な世界に立ち向かう上で、「ぶつかることを恐がって、躊躇」することは許されない。作家は、「失敗を恐れずに挑戦すること」の重要性を読者に対して説いているのだと思う。

発問9：引用文全体を、Harry になったつもりで、感情を込めて音読してみましょう。

種類：解釈に関わる発問

解答：省略

備考：引用箇所は、Harry の不安な気持ち・思い切った決心・達成感等を描いており、音読に適している。読む箇所は同じでも、学習者によって音読は異ってくる。それは解釈が人によって違うからだ。そのことを、音読を通して気付かせたい。

## 5. おわりに

本論ではまず、高等学校用リーディング教科書から Rowling を扱ったふたつのレッスンを取り上げ、それらを本文と発問の観点から分析した。その結果、本文には、作品そのものではなく、作品や作者を紹介した記述文のみが載せられていることが分かった。発問では、「内容確認のための発問」が多数を占めていること、また、「内容確認のための発問」から即座に「感想を求める発問」に移行していることも分かった。

以上の分析から、本論としては、(1) 教材本文に作品そのものも活用すること、(2) 発問に段階性を持たせること、の2点を提言することとした。

第1節では、高校生にとって文学が難解であると思われる理由をふたつ指摘した。つまり、語彙・文構造・話の展開といった、テキストを「正しく理解する」上での難解さと、テキストを正しく理解した上で読者が展開すべき解釈上の難解さである。バランスよく配置された「内容確認のための発問」「推論力を要する発問」「解釈に関わる発問」によって、テキストの「正しい理解」から無理なく「解釈」へとつながっていくことが期待される。

最後に今後の課題を2点挙げておきたい。(1) 本論は、平成15年に検定を受けた高等学校用リーディング教科書から、Rowling に関するレッスンのみを詳しく分析した。冒頭でも触れたように、英語文学が教科書で扱われることはあまりないのであるが、そのような現状にあって Shakespeare 等の例がないことはない。これらの作家についても同様の分析をし、英語教育における英語文学の位置付けをより包括的に考察する必要がある。(2) 本論は、教科書の問題を指摘した上

で、それをいかに解決すべきかを教材開発という視点から探った。しかし、実際の教材開発は現場の教師に委ねられている部分が多い。そもそも、英語文学が教材として倦厭されがちであることの一因として、教える当人の教師が「文学の扱い方がわからないと感じている」という点が挙げられる（海木・斎藤・中村・室井 9）。もちろん教師も、大学で英語の教員免許状を取得するにあたって、英語で書かれた文学に多少なりとも触れたはずである。しかし、大学で教えられる文学は、必ずしも中等教育レベルの英語教育を視野に入れたものではない。よって、大学を卒業し、教壇に立つようになって、教師は大学で学んだはずの文学の扱い方がわからないのだ。教師を目指す大学生にいかに英語文学を教えるべきかについても考えて行きたい。

広島大学

### 参考文献

- Brumfit, Christopher, and Ronald Carter, eds. *Literature and Language Teaching*. Oxford: Oxford UP, 1986.
- Carter, Ronald, and John McRae, eds. *Language, Literature and the Learner*. London: Longman, 1996.
- Carter, Ronald, and Michael N. Long. *Teaching Literature*. London: Longman, 1991.
- Collie, Joanne, and Stephen Slater. *Literature in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Lazar, Gillian. *Literature and Language Teaching: A Guide for Teachers and Trainers*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Nuttall, Christine. *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. London: Heinemann Educational Books, 1982.
- Widdowson, Henry G. "The use of literature." *On TESOL '81*. Ed. Mary Hines and William Rutherford. WA: TESOL, 1982.
- 植木研介・小野章「大学における英文学教育と英語教育現場での文学教材使用の実践的研究－Samuel Richardsonの *Clarissa Harlowe* (1748-49) の理解内容と音読－」『広島外国語教育研究』4, 2001年。1-17頁。
- 海木幸登・斎藤兆史・中村哲子・室井美稚子「文学こそ最良の教材：英語の授業にどう生かすか？」『英語教育』2004年10月増刊号, 大修館, 2004年。6-14頁。
- 木塚雅貴「英語教育における教材としての文学作品の意義－Communicative Language Teachingの視点から－」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』58 (1), 2007年。151-163頁。

- 谷岡朗・畠田豊文・本庄寛『New Stage: English Reading』池田書店, 2004年。
- 中村愛人「英語教育における文化教材としての文学作品の意義」『広島大学大学院教育学研究科紀要』52 (2), 2003年。115-119頁。
- 西原貴之「文学テキストから文学的読解へー第二言語の言語知識発達的面からー」『中国地区英語教育学会研究紀要』33, 2003年。11-20頁。
- 根岸雅史・有田みさ子・狩野晶子・静哲人・高山芳樹『Planet Blue: Reading Navigator』旺文社, 2004年。

## Literature in English Textbooks for Upper Secondary School: An Analysis of Texts and Questions

---

Akira Ono

---

*The Course of Study for Upper Secondary School: Foreign Languages* implemented in 2003 prescribes four types (from Type A to Type D) of “Language Activities” for reading English, and the third one (Type C) is “To read stories etc. and talk or write about one’s own impressions.” The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) attaches “The Teaching Guide” (*Kaisetsu*) to *The Course of Study*, and for Type C the guide reads: “We read to get information or grasp writers’ intentions. We also read to enjoy the act of reading itself. This is especially the case with literary works such as poems, stories, and plays.” The phrase “literary works” is here. *The Course of Study* is usually revised every ten years, and the one to be implemented in 2013 does not refer to “literary works” even in its teaching guide. The fact that the phrase has been deleted altogether symbolises the present position of literature at the secondary school level.

In the past literary works accounted for a large part of Japan’s secondary school textbooks. (See Ozasa, Toshiaki, and Haruo Erikawa, eds. *The Historical Study of the English Language Textbooks*. Tokyo: Jiyusha, 2004.) In recent years, however, literature has been driven into the periphery. This is mainly because the emphasis in Japan’s English language education has been shifted towards the utterances of daily communication. *The Course of Study* prescribing that “communicative activities should be conducted in concrete language-use situations,” it is no wonder that literature is rarely used in the classroom.

Despite the recent unpopularity of literature as a teaching material, there are some (not many) cases in which literary works are used in the textbooks authorised by MEXT. Among the lessons related to literature, I have chosen two on *Harry Potter* and examined them in terms of both texts and questions attached to them. Whether *Harry Potter* can be regarded as literature might be controversial. At least it is a “fantasy,” which can be categorised as a literary form. Bearing Japanese secondary school students as target learners in mind, I have decided to consider *Harry Potter* literature. (If we exclude *Harry*

*Potter* popular especially among young Japanese people, literature might vanish from textbooks altogether.)

The two lessons examined are from two different textbooks, both of which were authorised in 2003. One is in *New Stage* published by Ikeda-shoten, and its text, summarising Chapter 6 of *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, describes how Harry leaves for Hogwarts from Platform Nine and Three-Quarters, King's Cross Station. The other lesson is in *Planet Blue* published by Obunsha, and its text consists of the writer's answers to two questions: "When did the idea of Harry Potter first enter your head?"; "Can you describe the process of creating the stories?" In both lessons the texts are followed by some questions for students to answer. The questions can be classified into just two types: (1) questions requiring literal comprehension of the texts; (2) questions requiring general impression of the texts.

Based on the above examination, I would like to make two suggestions: (1) it is important to read literature *itself* as well as to know *about* stories or biographical episodes; (2) questions following the texts should be more varied, requiring students to "read between the lines" or to be more involved with the texts. To exemplify these suggestions, I have chosen a passage from the original of *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, and added to it some questions which I assume will lead students to "literary reading" of the text beyond its "literal reading."

*Hiroshima University*